かうした句まで添へて居るに見ても其悦びの尋常一様でなかつた事が推測される、分けて如行門弟竹戸と云ふ男がまめ〳〵しく芭蕉に事へ肩腰を按摩して芭蕉から紙衾を貰つたなどゝ云ふ逸事もある程如行亭は歡喜の聲に盈ちたのであつた。芭蕉は然し長くそこにとゞまらうとしなかつた。疲勞を休める事僅かに三日舟で木曾川を下つて伊勢へ入つた。これは伊勢大神宮の遷宮の式を拜すべく心懸けたのであつたが十日と云ふその日に間に合はなかつたので僅かに外宮の遷宮式のみを拜し二見へ來て「蛤や」の吟が遺されたと傳へられるこの「行く秋」の表現に對して古來

種々の議論もあるやうであるが、これは逝く秋の感じではなくして二見と別れ行く自分の對照に秋を取合はせたものではあるまいかと思ふ、蛤の二見にわかれ行く……秋ぞではないかと思ふ。江戸を發足して羈旅百六十餘日、行程は武藏を振出しに下野岩代陸前陸中羽前羽後越中越後加賀越前美濃伊勢六百餘里に達して居る、多病羸弱の身をもつてこれだけの行脚を續け得た芭蕉は此稿を結ぶにあたつて詩神の惠みの厚く且つ深かつた事を泌々感謝したことであらう。

（をはり）

奥の細道備考

杉風が別墅　幕府の御用商人杉山藤左衛門、屋號鯉屋と稱し、深川六間堀に二の別莊を有す、一が芭蕉庵、その一が新たに芭蕉が引移れる寮である。

（本文一五〇頁參照）

吳天白髮の恨　白樂天の詩、「去年九月到東洛、今年九月來吳鄉、兩邊蓬鬢一時白、三處菊花同色黃」とある。

（本文一五七頁參照）

剛毅木訥　論語に出づ。

（本文一六四頁參照）

二荒山開基　日光山志には「勝道上人天平神護二年當山を開闢し」云々とあり、東照宮造營以後、天海が中興の座主となり、その後親王家に移つたものとも傳へられる。

（本文一六五頁參照）

黑髮山　一に男體山とも云ふ。

（仝　上）

夏のはじめ　は夏のはしめと讀む、夏行（げあん）、夏書（げかき）、夏籠（げごも）り。

（本文一六九頁參照）

那須の黑羽　舊幕時代大關氏の領地であり、芭蕉行脚の當時には一萬八千石を領して居た。今西那須野驛から輕便鐵

道が敷設されて居る。

（本文一七一頁參照）

那須の篠原　源實朝の歌に「もの、ふの箭なみつくろふ籠手の上に、あられたばしる那須の篠原。」

（本文一七七頁參照）

雲岸寺　臨濟宗の寺、崇德天皇の大治年中に建てられ、佛國禪師が北條時宗の助力を得て再建したと傳へられる。

（本文一八〇頁參照）

雲岸寺十景　玉机峰、珍鏡岩、龍雲洞、千丈岸、水分石、十梅林、海岸閣、飛雪亭、鐵蓋峰、竹林塔を指す、

（本文一八一頁參照）

佛頂和尚　和尚は後訴訟事件に携はつて江戸に出で、深川大工町に居た、芭蕉とは小名木川を隔てゝ、呼べば應へん近距離の間柄であつたので、芭蕉は屢々和尚を訪問して、禪機を問ふたものであるらしい。

（仝　上）

清水流るゝ柳　一に遊行柳と稱し、今も芦野村八幡宮の傍に存す。

（本文一八八頁參照）

殺生石の句　別に「石の香や夏草あかく露あつし」の吟がある。

（仝　上）

清輔の袋草子　竹田太夫國行と云ふ者、陸奥の國に下向の時、白河の關過る

日は、殊に裝束結ひ云々。

（本文一九一頁參照）

かげ沼 建暦年間和田平太胤長、此處に配流された時、其妻鏡が沼に沈め、身を投げたところから、鏡の光が水底に明かだったと云ふ。（本文一九四頁參照）

行基菩薩 聖武帝時代の高僧

（本文一九八頁參照）

椽拾ふ深山 杜子美が七歌の第一首に「有客有客字子美、白頭亂髮垂過耳、歳拾椽栗隨狙公、天寒日暮山谷裏」云々

（仝　上）

黒塚の窟 昔那須の修驗僧祐慶、こゝに宿る、主婦終夜寢ず深更薪を山に養る祐慶大に怪み、其留守房中を見れば、積骸山の如し、祐慶驚いて逃ぐ、主婦趁ふ事急なりと奥州觀迹聞老志に書いてある。

（本文二〇〇頁參照）

晋の羊祐の古事 墮涙の碑は峴山にある、晋書羊祐傳に云ふ、羊祐常に峴山の風景を賞し、置酒吟詠終日倦まず、我死するも魂魄なほ應にこゝに登るべしと云ひて卒す、襄陽の人乃ちこゝに碑を建てゝ祭す、碑を望む者流涕せざるはなし、杜預よつて墮涙の碑とす云々。

（本文二〇七頁參照）

笠島の句 此句猿蓑集には「笠鳴や」

とあり、井泉水氏「奥の細道新釋」には猿蓑にさうあるけれども、それでは「いづこ」が「ぬかり道」の方へつく言葉となつて不可ない云々。

（本文二一三頁參照）

四維 東西南北の謂。

（本文二二二頁參照）

神龜元年 聖武天皇の御代。

（仝　上）

天平寶字 淳仁天皇の御代。

（仝　上）

按察使と節度使 按察使は國司の政蹟を觀察調査する職務、節度使は兵士官船檢定の役目。

（仝　上）

野田の玉川 全國六玉川の一である六玉川とは、山城の井出の玉川、攝津の玉川、紀伊の玉川、近江の玉川、武藏の玉川及びこの野田の玉川を併せたのである。

（本文二二五頁參照）

國主再興 國主は藩祖伊達政宗を指す乃ち此神社の再興が慶長十二年の修造にかゝるからである。

（本文二二八頁參照）

袖のわたり 尾ぶちの牧、新後拾遺集に「みちのくの袖のわたりの涙川、心の中に流れてぞすむ」又新千載集に「みちのくのまゝの萱原遠ければおもかげにしも見ゆといふものを」

（本文二四一頁參照）

戸伊摩 今登米と書き、トヨマと云ふ

（仝　上）

雲端につちふる 杜子美の詩「已入二風磴雲端　羅は旋風捲土の象」

（本文二五九頁參照）

わりなき一巻（本文二七〇頁參照）

五月雨をあつめて早し最上川　翁
螢をつなく岸の船枕　一榮
瓜畑いさよふ空に影まちて　曾良
里をむかふに桑の細道　川水
牛の子に心なくさむ夕まぐれ　榮
雨雲重し懐の陰　翁
傘を枕にたてゝ山おろし　川
松むすび置く國の境目　良
永樂の古き寺領をいたゞきて　翁
夢と合する大應の紙　榮
蕉の名を曉とかこちたる　良
爪紅粉うつる双六の石　川
まき揚る簾に兒の這ひ入つて　榮
煩ふ人に告る秋風　翁
水かふる井手の月こそ哀なれ　川
碓うちとてえらび出さる　良
花の後花を織する花むしろ　榮
澄祭いとなむ山陰の塔　川
綾多村は浮世の外の春富て　翁
かたなかりする甲斐の一鼠　良
葬垣人も通らぬ關所　川

物書くたびに削る松風　榮
風祭る髪は白髪のかゝるまで　良
集に遊女の名をとゞむ月　翁
鹿笛に貰ふもおかし鎧足駄　榮
柴賣に出て家路忘るゝ　川
ねふた咲木陰を蛙のかけろひに　翁
たえ〳〵鳴す千日の鐘　良
故郷の友かと後ふりかへり　川
言葉論する船の乘合　榮
雪髪師走の市の名殘とて　良
煤掃の日を竹庵の客　翁
亡人を古き懐紙にかぞへられ　榮
やもめ鴉の迷ふ入相　川
平つゝみ塑も越べき花の峯　翁

山田の稲を祝ふ春雨　良

仙人堂 堂は最上郡古口村にあつて、義經の家臣常陸坊海尊の遺跡と云傳へられて居る。（本文二七〇頁參照）

圖司佐吉 號を露丸と稱し、芭蕉に私淑す。（本文二七一頁參照）

能除大師 推古天皇の皇子。（本文二七三頁參照）

月山 月讀命を祀り宮幣中社。（本文二七五頁參照）

木綿しめ 純白なる紙製の祭裝。（仝　上）

湯殿山 頂上岩窟内に大巳貴命を祀る

（仝　上）

むや〳〵の關　一に烏耶無耶關とも云ひ、陸前柴田郡に屬し、羽前國境に位置す。（本文二八七頁參照）

親不知子不知　青海驛より市振に至る難所、今山腹に隧道を穿ちて歩行に便ず。（本文二九六頁參照）

黒部四十八ケ瀬　黒部川の主流。（本文三〇〇頁參照）

擔籠の藤波　氷見の北方、藤の名所にして、一に多古とも書く。（仝　上）

樋口次郎　義仲の臣で名を兼光と呼び實盛とは舊知の人。（本文三〇八頁參照）

貞室、貞德　貞室は姓安原、花の本第二世として知られ、貞德は姓松永、花の本第一世にして、御傘其他の著がある。（本文三一頁三參照）

雙鳧　前漢書、蘇武別李陵詩中、雙鳧俱北飛一鳧獨南翔　云々（本文三一五頁參照）

潮越の松歌　一に蓮如上人の作とも云ふ。（本文三二〇頁參照）

北枝　本名立花次郎右衛門、蕉門の十哲。（本文三二二頁參照）

玉江の芦　後拾遺集に「夏かりの玉江のあしをふみしだきむれ居る鳥の空たつぞなき」（本文三二七頁參照）

氣比の明神　筍飯の明神とも云ふ、官幣大社。（本文三二九頁參照）

如行、前川子、荆口父子　如行近藤氏、大垣の人。前川氏、津田氏、仝上。荆口父子、宮崎氏、仝上。（本文三三三頁參照）

伊勢遷宮　二十一年目毎に執行、九月晦日。（本文三三四頁參照）

芭蕉行脚物語　完

昭和十一年十月十五日 印刷
昭和十一年十月廿五日 發行

定價金一圓也

著作者 眞繼義太郎
東京市神田區神保町三ノ十一

發行兼印刷者 上條壽美造
東京市神田區神保町三ノ十一

著作權登錄
版權所有
不許復製

發行所 東京市神田區神保町三ノ十一
日本佛教新聞社
電話九段三八一一番
振替東京五九三四五番

佛教書籍、佛畫、佛像、佛具類
總目錄ハガキ御申込次第送呈

340
581

終